

美浜町文化財地図



1 初代日ノ御埼灯台跡と千鳥の句碑

初代日ノ御埼灯台は、紀伊半島西岸を航行する船舶の指標として明治28年(1895)に設置された。設置当初の光源は石油であったが、大正6年(1917)に電化された。昭和20年(1945)7月に米軍機の爆撃により焼失、この年の12月に仮灯での点灯を再開した。いまま灯台跡のレンガ塀には、その時の弾痕が残っている。現在の灯台は三代目で、平成29年(2017)から供用を開始した。

現灯台脇には、昭和20年当時の灯台長一家に起こった悲劇を記す二つの「千鳥の句碑」が並んで建つ。

「妻長女三女それぞれ啼く千鳥 虚子」
「妻長女三女の千鳥飛んで来よ 稲人」



2 大賀ハス

大賀ハスは、大賀一郎博士が、昭和26年(1951)に千葉県内の検見川農場の泥炭地から蓮の実を発掘し、発芽育成させたことから名付けられたもので、約2500年前と推定される古代蓮である。

この蓮は、昭和37年1月に大賀博士自身が持参して分根移植したが育成が悪く、翌年再び移植した結果漸く生育・開花に至ったものである。その後、毎年開花時期に観蓮会が行われている。蓮池の傍らに「蓮は平和の象徴也 八十一翁 大賀一郎書」の記念碑が建つ。



3 クヌッセン顕彰碑

「海の勇者」として知られるヨハネス・クヌッセン機関長(デンマーク)の顕彰碑である。クヌッセン機関長は、昭和32年(1957)2月10日の夜、あらしの日ノ岬沖で、船舶火災により遭難した日本人船員を救おうとして激浪の海に飛び込み、波にのまれてしまった。その行いは、人種と国境を越えた人類愛の鑑(かがみ)として大きな感動をよび、日ノ岬パークには、その顕彰碑とともに胸像も建立されている。

なお遺体が発見された日高町田杭には、その供養塔と、遺体とともに流れ着いた救命ボートの格納庫が建てられ、助けることができなかった日本人船員の故郷である徳島県海陽町にもその感謝の気持を込めたクヌッセン顕彰碑が現存している。



4 万葉歌碑

「風早(かざはや)の三穂(みほ)の浦廻(うらみ)を漕(こ)ぐ舟の船人さわぐ波立つらしも」この歌は、ウミネコ島向いの石碑に刻まれている。(地元では大石(おおいし)と呼ばれている)万葉集に三尾を詠んだ歌が、この歌を入れて7首もある。三尾(三穂)の枕詞は「風早」で、紀伊水道から太平洋へと渡る日ノ御埼沖は風が強く海の難所となっていたので、三尾の港は風が収まるのを待つ避難港的な役割を担っていたのかも知れない。それだけに山に囲まれた地に住んでいた都人にとってあこがれの地であったのだろう。



5 弁天島

(うみねこ及びうみねこ繁殖地 県指定文化財)

昔からうみねこの繁殖地として知られ、うみねこ島とも呼ばれている。かつては島全体がうみねこの糞で真っ白に覆われていたが、現在はほとんど見られなくなった。島に弁財天の祠をまつているところから弁天島の名がついた。『紀伊統風土記』には「海士取島・・・村の正面海灣の中にあり樹木なし、回りの三四町盆山石の如し」と記され、過去にはアマトリジマの呼び名が一般的であったようである。



6 工野儀兵衛とアメリカ村

明治21年(1888)、工野儀兵衛は単身カナダへ渡航、バンクーバー近郊の鮭漁業の基地スティープストーンに到着した。儀兵衛は、フレーザー河を渡る鮭の大群を見て、その模様を故郷に知らせ、次々に親類縁者や村人を呼び寄せた。人々は「つれもていこらい」とばかりに儀兵衛を頼ってカナダに渡った。その結果、明治末にはスティープストーンで鮭漁業に従事する和歌山県人が2000人を超えたという。

三尾をアメリカ村と呼ぶようになったのは大正の初期からである。カナダ移民の母村として発展した三尾村は、かつての寒村から裕福な村へと変っていった。カナダからの送金によって住居の改築や改装が行われ、生活や服装も洋風化し英語混じりの言葉が使われる等、近隣にはない独特の村が出現したのである。

昭和63年(1988)10月、カナダ移民百周年記念事業が盛大に行われ、同時に儀兵衛の功績をたたえる顕徳碑も現在地に移された。平成30年(2018)には、かつての三尾村の再興を願ってNPO法人が結成され、レストランやゲストハウス、ミュージアムが開業した。ミュージアムの庭に立つテーマポールが、三尾の新しいシンボルとなっている。



7 旧野田家住宅(登録有形文化財)

昭和9年(1934)頃、カナダ・バンクーバーより帰国した中津家によって建築された洋風住宅である。その後、野田家の住まいとなった。

主棟部は木造二階建、寄棟造、その他は木造平屋建である。外観は南京下見板張り、水色のペンキを塗り、屋根は緑色のセメント洋瓦で葺かれている。内部は、和式と洋式が混在した和洋折衷の住宅となっている。門及び塀は鉄筋コンクリート造で、全体に洗い出し仕上げとした上質な塀である。

三尾集落の中にあつては洋風の当住宅はアメリカ村の象徴的な建物となっており、カフェを併設したミュージアムとして活用されている。



8 遊心庵(登録有形文化財)

昭和8年(1933)カナダにおいて鮭漁で成功した田中松蔵により、建築された住宅である。

主屋は南面し木造平屋建、瓦葺、西側には別棟が建てられている。主屋内部は、和式家屋であるが、別棟は洋風の応接間で外観も下見板を張るなど洋風意匠とする。門及び塀は、コンクリート造のモルタル洗い出し仕上げとし、主屋と同時期の建築とみられる。

現在は遊心庵と名付けられ、ゲストハウスとして利用されている。



9 アコウ樹・龍王神社社叢

(県指定文化財)(町指定文化財)

アコウはアジア東部の亜熱帯植物で、有田市矢櫃は本県における自生の最北限である。神社境内のアコウは根回り10m、枝元まで11mあり、推定樹齢は300年~350年で県下最大の樹である。

龍王神社境内の社叢は暖帯樹林で、参道沿いにはシイ・モチ・ホルトノキ・アコウなどが見られ、神社の南斜面には自生のイブキの大木がある。



10 薬師如来立像

法善寺薬師堂には薬師如来が安置され、秘仏となっている。

本像は頭・体の根幹部を檜の一材で彫成した一木造りで、頭上に肉髻を盛りあげ螺髪を彫出し衲衣は偏袒右肩にまとうている。左手に薬壺をのせ、右手は施無畏の印相で蓮華座に直立する立像である。また、一木造り特有の重量感があり、翻波式衣文が残る平安中期の仏像で美浜町内に残存する最も古く、かつ最も優れた仏像である。

この薬師如来像は、毎年2月11日の会式に開扉される。



11 逢母

熊野御坊南海バスの停留所「逢母」あたり一帯を逢母という。

日本書紀に「皇后南紀国に詣りまして、太子に日高に会いぬ」とあり、神功皇后が新羅から帰還して都に向かう途中、日高町阿尾の鉾突に上陸されたのち、この地において武内宿禰に抱かれてた御子、誉別皇子(のちの応神天皇)に逢われたのでこの名がついたといわれている。



12 本の脇古墳

この古墳群は、御崎神社の西北約300m、標高約40mの海岸段丘上にある。本の脇古墳は1号墳・2号墳の2基とも円墳である。現在、畑が荒れ山林と化しているが一部蓋石など露出しているのが確認できる。



13 御崎神社(姥目の老樹1株 県指定文化財)

・和田祭の鬼獅子 町指定文化財)

社伝によれば現在地背後の宮の谷に鎮座していたものを、貞観元年(859)に今の地に遷座したという。御崎神社は『三代実録』や『紀伊国神名帳』などに所載される日高地方で最も格式の高い神社である。境内には県指定文化財のウバメガシがあり、樹齢1100年といわれる。また、例大祭で演ぜられる熊(ざさら)の気配をたよりに踊る「和田祭の鬼獅子」が町指定文化財に指定されている。



14 雷神社の燈籠

雷神社は、明治41年(1908)御崎神社へ合祀されるまで、雷谷に鎮座し、「イカツチさん」とか「夕カオミヤはん」と呼ばれ崇敬された。また、「雷除けの神」として参詣者に雷除けのお守りをわたしたという。境内にはオガタマの大木があったが、近年枯死した。

この燈籠は雷神社のもので、燈籠竿部の北面に「雷神社」、西面には「天保十二年(1841)丑三月」と刻まれている。



15 八王子社跡の碑

碑面に「三尾窟 八王子社跡」とある。現在御崎神社に合祀されている八王子社が祀られていた地で、古くから「踏ますの石」と呼ばれる石があり、「知って踏んだら命がないぞ、知らずに踏んだら眼がつぶれる」という口伝があり、村人から畏怖されてきた。



16 和田高粒山狼煙場跡

(町指定文化財)

狼煙場跡は、西山頂上付近のピクニック緑地から日高町小池へ下る遊歩道脇(海側の丘陵上)に3基の跡を残し、御崎神社を真下に、煙樹ヶ浜を中心とした海岸線の景勝の地点である。狼煙台の規模は約90cmの自然石を利用した狼煙台が約10mの間隔で並び、一番下の狼煙台の下方に狼煙立て役の小屋跡や狼の糞、肥松などの狼煙庫があったとみられる。



17 常磐義塾之跡

常德寺第十二世湯川浄暢は、明治41年(1908)日高地方で初めての中等学校である常磐義塾を創設した。常德寺境内に日高地方における中学教育の先駆者として湯川浄暢の恭頌碑があり、又、旧常磐義塾校舎敷地内に「常磐義塾之跡」の碑が建つ。



18 煙樹ヶ浜

西川河口より西へ延びる、幅約500m、長さ約4.5kmの大松林。江戸時代初期から紀伊藩の保護と地域住民の努力とにより、今日の壮観をみた。植生は松を主とし、その数は10万本に及びという。煙樹ヶ浜の名は、大正末年この地に遊んだ近藤浩一路画伯が、雲煙模糊たる長丁と青松の景観に名付けたものである。



19 入山城跡

入山城跡は、和田地内の通称入山地区にあり、丘陵のほぼ中央部にある「城山」と南端の「本丸」と呼ばれる2か所の城跡が残る。いずれも青木勘兵衛由定の居城と伝えられるが詳細は定かではない。「城山」は本丸跡を土塁で囲み、西側に曲輪、空堀、馬場などの遺構を残す。また、「本丸」は、土塁に囲まれた本丸跡と本丸の北及び西側に土塁で囲む二の丸跡を残している。



20 湯川直光の墓

三宝寺墓地内に湯川直光の墓があり、直光の法名とともに教興寺の戦いで戦死した日が墓石の基礎部に刻まれている。(「永禄五年(1562)祥宗吉大禅定門 五月廿日」)



21 女郎の墓

入山の観音堂近くに高さ37cmの一石五輪塔がある。西面に「天正三年(1575)乙井 妙口禅口 尼 四月五日」の刻字があり、土地の人は「女郎の墓」と呼び、「紀伊国名所図会」にも記されている。この墓は、入山城主青木勘兵衛の女の墓といわれているが、青木氏が入山城に居城していたかどうかも分からず疑問が残る。



22 念仏松跡

徳本上人(1758~1806)が不漁続きに苦しむ漁民のため、念仏練行したところとされる。この松はいかなる暴風雨にもいためつけられたことがないといわれてきたが、惜しいことに、昭和53年松食い虫による被害のため枯死した。



23 天寿丸漂流記(写)・天寿丸絵図

・見聞絵図(町指定文化財)

嘉永3年(1850)1月、團浦の和泉屋庄右衛門の所持する廻船天寿丸(九五〇石積)が江戸より帰航中伊豆沖にて遭難。漂流すること50余日、乗組員はアメリカ合衆国の捕鯨船に救助された。船頭虎吉等5名はハワイ、香港、上海を経て長崎に帰り、他の8名(内1名死亡)はカムチャッカ、アラスカを経て伊豆に帰着した。その間の見聞録である。絵図、見聞絵図は乗組員の岩瀬佐蔵の筆になる。(個人所蔵)



24 松見寺

山号を海龍山と称す。はじめ浄土真宗であったが、寛永12年(1635)天台宗に改宗。本尊宝冠釈迦如来。寺域は吉原坊舎跡で日高真宗史上貴重な史蹟である。吉原坊舎は、戦国時代の亀山城主湯川直光が、本願寺証如上人から受けた恩義に対して、謝恩のため、天文元年(1532)に創建したもので、日高別院の前身である。



25 松原王子神社社叢(県指定文化財)

松原王子はもと吉原王子と呼んだ。境内の社叢は日高地方でも稀に見る天然林で、森林の変遷を示す好例とされており、49科89種に及び植物はほとんど自生である。



26 吉原遺跡

日高川河口から北西の日ノ御崎に向かって海岸沿いに全長約4.5km、幅0.5kmの砂丘があって、その南東部分の砂丘稜線付近にあるのが吉原遺跡であり、吉原遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての墓域として知られている。これまでの県文化財センターが実施した調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけの方形周溝墓や土壇墓、奈良時代から平安時代の土壇墓、時期不詳の溝状遺構や小穴などが確認されており、最近の二度にわたる調査でも奈良時代から平安時代の土坑、古代以前の列石状遺構、中世から近世の火葬墓が確認されており、また弥生時代と古墳時代の土器埋納遺構のほか土坑や溝状遺構などが確認されている。



27 新川

和田・入山・小池・吉原の深田の悪水を、大川橋南の西川に排水しようとし、江戸時代に幾度か掘削が試みられたが、失敗に終わったので、日高郡の方言にあるしなくともいいことをするという意味をこめて俗に「てんごのかわ」という。



28 津浪の碑

濱ノ瀬公民館の前にある。嘉永7年(1854)11月5日の大津波に関して、後世のために木村理三郎が世話人となり、文久2年(1862)藤井の瀬戸佐一郎が建てたものである。



29 善明寺焼籠目花器(町指定文化財)

浄土真宗常福寺に町指定文化財の善明寺焼籠目花器がある。

善明寺焼きは宝暦(1751~1762)の頃、御坊市島の善妙寺住職玄了が名田町桶井の土を用いて焼いたものと言い伝える。そのため「善明寺焼」を「善妙寺焼」と記す場合もある。

